

創作ダンスの即興表現における学びの様態に関する事例的考察

—位置取りに着目して—

柳 瀬 慶 子

A Case Study on the State of Learning in Improvisational
Expression of Creative Dance
-Focusing on the Position-

Keiko YANASE

2018年11月9日受理

抄 録

創作ダンスの即興表現における学びの様態について、グループ内での運動者の位置取りに着目して明らかにすることを目的とした。大学におけるダンス授業実践を事例として、「空間のくずし」に基づいた「調和」「くずし」(変化)の状態を分析し考察を行った。その結果、①創作ダンスの即興表現における「調和」とは、「2者間の対話」「3者間の対話」「全体との対話」「場との対話」である。②「くずし」(変化)は「調和」が飽和状態に達した時に起こりやすい。③「くずし」(変化)が「調和」に変換されることにより、創作ダンスの即興表現は「調和」と「くずし」(変化)の往還で成り立っている。以上3点が考察され、他者の表現により、自己の思いがけない新しい表現が生起し、さらにそれが他者の新たな表現を生むという学びの様態が見出された。

キーワード：創作ダンス、即興表現、位置取り、調和、くずし(変化)

1. はじめに

体育科教育におけるダンス・表現運動領域は、以前から変わらず、子どもにとっては「恥ずかしい」「何を学んだのかわからない」という声をよく聞く(麻生, 国立教育政策研究所, 古木)。一方、教師も「何をどのように指導してよいかかわからない」として指導を苦手に感じる者が多く(玉城, 北島, 寺山, 松田), 中学校でのダンス必修化が始まってからはダンス講習会でダンス指導の苦手な教師や男性教師の参加が増えたという報告も聞かれる(村田, 2012)。こうした学習の見通しの困難さから、ダンス・表現運動の授業では、動き方やよりよい表現を子どもに指導して獲得させる「刺激論(トレーニング)」(宇土)に基づく学習や、最初にテーマや音楽を提示して

子ども同士でダンスを考えさせる「内容論（ラーニング）」（宇土，前掲書）に基づく学習が展開される事態を招いている。これらの学習構造は，学習の導入（意欲）と結果（獲得量）が問題とされ，どちらも学習過程がブラックボックス化しており，岡野（2015）は，「体育学習から『質』と『意味』を奪うことにつながり，体育を学ぶ意味や目的を見えにくくする」と警鐘を鳴らしている。

1990年代に入って，21世紀型の学校ヴィジョンに基づいた「学び論」が佐伯胖や佐藤学らによって提唱された。佐伯（1995）は，学び（学習）とは，個人の知識獲得過程ではなく，他者やモノとのかかわりのある活動を通して意味を生成していく社会的行為であり，文化的実践へのかかわりであると定義した。さらに，佐藤（1995）は，対象世界・自己・他者との3つの対話によって遂行される「対話的学びの三位一体論」を提示した。体育科教育では，岡野（前掲書）が「体育における対話的学び」として，対象世界との対話【運動の中心のおもしろさ（文化的な価値）】，自己との対話【わざ（身体技法）】，他者との対話【仲間との質の高い課題探究】の三位一体を提唱している。

筆者は，こうした考え方にに基づき，過去にリズムダンス授業の即興表現の実践事例を元に「踊っているということ」を現象学的視点から捉え，「踊っているということ」は「他者関係」そのものであり，そこに「融合関係」「応答関係」「共感関係」という3つの変容過程を見出した（柳瀬，2009）。また，リズムダンスの「中心のおもしろさ」である「リズムにのるとということ」の在り様について，実践事例からリズムに「合わせる」とことと「くずす（変化させる）」の往還であることを明らかにして（柳瀬，2014），ダンス・表現運動領域の授業における視座を提出してきた。

ダンス・表現運動授業における学び研究には，他に以下のものが挙げられる。伊藤（2013）は，ダンスにおける「他者との関わり」について，授業観察と授業者へのインタビューから動きの形成には「共有」と「やりとり」の2つがあることを見出している。原田（2006）は，「外に向けて拓かれていく身体と心」をテーマに学生の内省録から，「その場での『自主』（ミズカラ構造）と『協調』（オノズカラ構造）の自由な出入り」が踊り手の達成感や満足感を導くことを明らかにした。新山ら（2014）は，即興表現の学びの特性として，保育学生の授業の内省録を量的・質的に分析し，「感覚的行為」「関係性から生じる行為」「思索的行為」「理解や判断の行為」があることを明らかにした。

そこで本研究は，創作ダンスの即興表現の授業実践を行い，グループ内での運動者の位置取りに着目し，創作ダンスの即興表現における学びの様態について明らかにすることを目的とする。グループにおける運動者の位置取りが学びの様態の把握を可能にすると思われる根拠については，上野（1996）の「協同的な活動を組織化するリソース」に依拠する。上野は「空間と身体配置」は「これから行われうる行為，意図，事態への理解といったものを社会的に表示するリソースになりうる」と述べ，「ある場所に立つことは，ある社会的関係をつくることを可能にし，また，そのことを社会的に観察可能にしている。」とも述べている。そして，身体配置とは，ポジショニング（あ

る場所を占め且つある姿勢を組織化する行為)とオリエンティング(あるポジショニングでの身体や視線の向き)のことであり、「協同や分散の組織化のあり方は、あるポジショニング、あるオリエンティングといった空間の組織化として表現される」とも述べている。上野の言うポジショニングはダンスでいうグループ内での位置取りであり、オリエンティングは運動者のポーズと置き換えることができ、ダンスにおけるグループ内での位置取りが運動者の学びの様態を示す根拠となりうると考える。

2. 研究方法

大学の教職必修科目である「ダンス」授業(筆者授業担当)において、創作ダンスの即興表現の授業実践を行い、動画記録をとる。活動人数が多くなり過ぎないように、運動者を9人ずつ4つのグループ(A・B・C・D)に分けて、全グループの記録をとる。ビデオ撮影は2台のデジタルビデオカメラ(Panasonic HC-V520M, Panasonic HC-W585M)で行う。1台は正面から授業者が撮影を行う。もう1台は、位置取りを明確に記録するために、約3m上方からアシスタント学生が撮影を行う。なお、運動者には、「常葉大学研究倫理」に基づき、本稿への掲載の承諾(署名・捺印)を得た。

動画記録を見て、4つのグループに生じた学びの様態を位置取りの視点から分析し考察を行う。分析の視点として、村田(2002, 2009)の提唱するダンスにおける「4つのくずし」を参照する。「4つのくずし」とは変化のことであり、「空間のくずし」「身体のくずし」「仲間のくずし」「リズムのくずし」がある。「くずし」(変化)は、運動者の表現性の現れと見なすことができる。4つある「くずし」(変化)の中でも、本研究では位置取りに着目することから、「空間のくずし」の視点を援用しながら見極めることとする。「空間のくずし」とは、方向や場の使い方の変化のことであり、全体的に「調和」した位置取りではない状態を示す。グループ内での位置取りの状態として、他者の前後左右に位置取ったり、センターライン上に位置取ったり、2者の真ん中に位置取ったり、全体的な隊形をイメージして(かたどって)位置取ったり、全体のバランス(前後左右の人数比率)を考えて位置取ったりする状態を「調和」と捉える。反対に、前後左右に位置取っていないなど他者との関連が見られない位置取りは「調和」を打ち破る「くずし」(変化)と捉えて、その状態を見極めることにより、学びの様態を明らかにする。また、前述の上野(前掲書)の論にもあるように、「身体配置」には位置取りとポーズの両方があり、この2つは関連していると考えられる。そこで、位置取りだけでは「調和」「くずし」(変化)の判断が難しい場合は、運動者の「ポーズ」も参照することにする。例えば、位置取りが他者と前後左右になっても、明らかに斜めの位置取りを意識していて、且つポーズが他者と同じもしくは類似させていたりする場合は「調和」と見なすこととする。逆に、位置取りが偶然他者と前後左右になっても、位置取りを他者に合わせようと意識せず、且つポーズも他者と異なる場合は「くずし」(変化)と見なすこととする。

3. 授業概要

本授業は、T大学教育学部の教職必修科目である平成30年度開講「ダンス」授業(第3回)で実施した創作ダンスの即興表現「生け花」である。授業概要については、以下の通りである。

- 日 時：平成30年10月4日(木)15時～16時30分
- 場 所：T大学Kキャンパス多目的体育室
- 講義名：ダンス
- 授業者：筆者
- 運動者：T大学教育学部の平成30年度後期「ダンス」受講生36名
- 題材名：「生け花」(創作ダンス)
- 活動内容と行い方

9人1グループとなり、1人ずつ移動・ポーズをして最終的に全員で「生け花」を表現する活動である。「生け花」は、連続して計3つ表現する(「生け花1」「生け花2」「生け花3」)。事前にグループのメンバーの中で、1番から9番までの番号を決めておく。

1つ目の「生け花1」は、授業者が1番から9番まで順に番号を呼び、呼ばれた運動者は順番に「生け花1」を表現する場所へ移動して、そこで「生け花」をイメージしたポーズで止まる(写真1)。なお、フロアにはセンターを示す印を床に貼っておき、「生け花」を表現する正面は決めておく。

2つ目の「生け花2」は、「生け花1」のポーズをとったままの状態、授業者がランダムに1番から9番までの番号を呼び、呼ばれた番号の運動者は、隣の「生け花2」を表現する場所へ移動して、そこで「生け花」をイメージしたポーズで止まる(写真2)。なお、フロアにはセンターを示す印を床に貼っておき、「生け花」を表現する正面は1つ目と同様とする。



写真1. 「生け花1」の完成場面



写真2. 「生け花1」から「生け花2」への移動場面

3つ目の「生け花3」は、「生け花2」のポーズをとったままの状態、授業者の指示はなく運動者の自由なタイミングで「生け花1」を表現した場所へ移動して、そこで「生け花」をイメージしたポーズで止まる。ただし、他者と同じタイミングで移動することはできず、一人が移動・ポーズを行ってから、次の運動者がタイミングを

見計らって移動することとする。なお、表現する正面は、1つ目・2つ目と同様とする。

4. 結果

4つのグループ(A・B・C・Dグループ)の「生け花1」「生け花2」「生け花3」の各運動者の位置取りを、上方から捉えた図で示す。図の記号の意味は、以下に示す。あわせて、各運動者の位置取りの状態を、各グループ内で移動した順に表で詳細を示す。表には、位置取りの「状態」(調和・くずし)と、「位置取りの詳細」(ポーズも含む)について記述する。「位置取りの詳細」の中の「左」「右」の記載は、運動者に向かって撮影者から見た方向を示す。なお、1番に移動した運動者(①の表示)については、他者との関係で位置取りを見取れないために、位置取りの「状態」の記載は行わない。

	:フロアのセンター印 *図に示されていない場合は、運動者がセンターを位置取っていることを示す。
①～⑨	:丸数字は移動した順番を示し、且つ他者と調和した位置取り。
②～⑨	:白抜きの丸数字は移動した順番を示し、且つ他者とは「調和」しない「くずし」(変化)が見られた位置取り。
<u>②</u> ～ <u>⑨</u>	:白抜きに二重下線が入った丸数字は移動した順番を示し、且つ後者の位置取りによって「くずし」(変化)が「調和」に転じた位置取り。
	:対称的な位置取り(対称的なポーズやポーズのまねを含む)
	:センターを意識した位置取り
	:2者の真ん中に位置取り
	:全体のバランス(人数配置)を考えた位置取り
	:全体を円形にイメージした位置取り

4-1. Aグループの結果

Aグループの「生け花1」では、図1、表1の通り、「調和」が計5回、「くずし」が計3回見られた。順番としては、「くずし」2回⇒「調和」5回⇒「くずし」1回となった。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。④が「全体のバランスをとって右に位置取る」ことによって、①から③まで全体的な群のまとまりが見られ、②と③のくずしが調和に転じた。同様に、⑦が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって、①から⑥まで全体的な群のまとまりが見られた。

表 1. Aグループ「生け花1」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター
②	くずし	①の左斜め後方（ポーズ異なる）
③	くずし	①と②の左斜め前方（ポーズ異なる）
④	調和	右の空間を埋めて①～③の全体のバランスをとる
⑤	調和	②と④の真ん中
⑥	調和	⑤の左横（ポーズ対称）
⑦	調和	左の空間を埋めて①～⑥全体のバランスをとる
⑧	調和	⑤と⑥の真ん中
⑨	くずし	⑤の右斜め後方（ポーズ異なる）

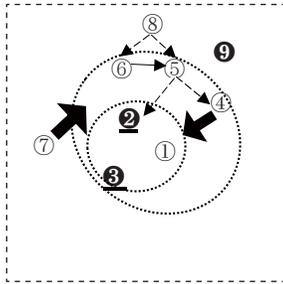


図 1. Aグループ「生け花1」位置取り

Aグループの「生け花2」では、図2、表2の通り、「調和」が計6回、「くずし」が計2回見られた。順番としては、「調和」2回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」1回⇒「調和」3回となった。⑥は、①の前方に位置取っているが、ポーズが異なっていることにより、「くずし」とした。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」が見られた。⑤が「横に位置取る」ことによって④の「くずし」が、また、⑦が「横に位置取る」ことによって⑥の「くずし」が、それぞれ「調和」に転じた。

表 2. Aグループ「生け花2」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センターの左斜め後方
②	調和	①の左横（ポーズ対称）
③	調和	①と②の真ん中
④	くずし	②の左斜め後方（ポーズ異なる）
⑤	調和	④の右横（ポーズ対称）
⑥	くずし	①の前方（ポーズ異なる）
⑦	調和	⑥の左横（ポーズ対称）
⑧	調和	⑥と⑦の真ん中
⑨	調和	①と②の真ん中

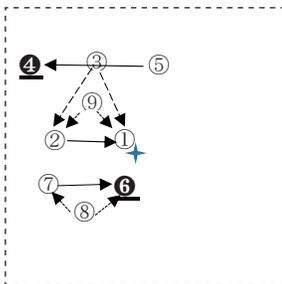


図 2. Aグループ「生け花2」位置取り

Aグループの「生け花3」では、図3、表3の通り、「調和」が計7回、「くずし」が計1回見られた。順番としては、「調和」4回⇒「くずし」1回⇒「調和」3回となった。なお、④は「右斜め前方」に位置取っているが、ポーズが①②と同じであり、①～④の群としてのまとまりが見られるため「調和」とした。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」が見られた。⑦が「横に位置取る」ことによって、⑥の「くずし」が「調和」に転じた。

表 3. Aグループ「生け花3」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センターの左
②	調和	①の右横（ポーズ対称）
③	調和	①と②の真ん中
④	調和	②の右斜め前方（ポーズ①②と同じ）
⑤	調和	④の左横（ポーズ対称）
⑥	くずし	①の左斜め後方（ポーズ異なる）
⑦	調和	⑥の右横（ポーズ対称）
⑧	調和	⑥と⑦の真ん中
⑨	調和	④と⑤の真ん中

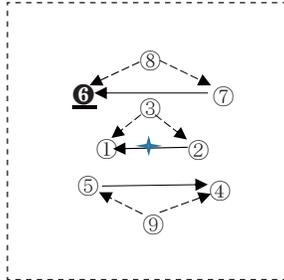


図 3. Aグループ「生け花3」位置取り

4-2. Bグループの結果

Bグループの「生け花1」では、図4、表4の通り、「調和」が計5回、「くずし」が計3回見られた。順番としては、「くずし」1回⇒「調和」3回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回となった。⑥は、②の右横に位置取っているが、ポーズが異なっていることにより、「くずし」とした。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」が見られた。⑦が「横に位置取る」ことによって⑥の「くずし」が「調和」に転じると共に、真ん中の②を⑥と⑦が囲む位置取りとなり、②の「くずし」も「調和」に転じた。また、⑨が「横に位置取る」ことによって⑧の「くずし」が、それぞれ「調和」に転じた。

表 4. Bグループ「生け花1」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター
②	くずし	①の右斜め後方（ポーズ異なる）
③	調和	①の右横（ポーズ類似）
④	調和	①の左横（ポーズ①と同じ）
⑤	調和	③と④の真ん中
⑥	くずし	②の右横（ポーズ異なる）
⑦	調和	②を挟んで⑥の左横（ポーズ⑥と対称） *②を中心に⑥⑦が寄り添う形になる
⑧	くずし	⑤の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑨	調和	⑧の左横（ポーズ対称）

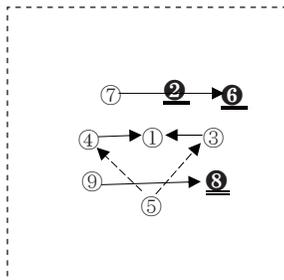


図 4. Bグループ「生け花1」位置取り

Bグループの「生け花2」では、図5、表5の通り、「調和」が計5回、「くずし」が計3回見られた。順番としては、「くずし」2回⇒「調和」3回⇒「くずし」1回⇒「調和」2回となった。②は、①の前方を位置取っているが、ポーズが異なっていることより「くずし」とした。同様に、⑦は、⑤の左横に位置取っているが、ポーズ

が異なっていることにより「くずし」とした。「調和」は、「横に位置取る」「センターライン上に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」「全体を円形にイメージして位置取る」が見られた。⑤が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から④まで全体的な群のまとまりが見られ、②と③の「くずし」が「調和」に転じた。

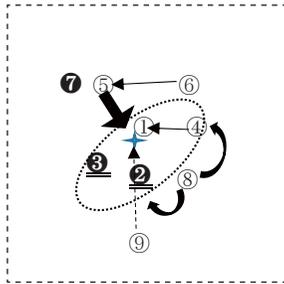


図5. Bグループ「生け花2」位置取り

表5. Bグループ「生け花2」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター右斜め後方
②	くずし	①の前方（ポーズ異なる）
③	くずし	②の左斜め後方（ポーズ異なる）
④	調和	①の右横（ポーズ同じ）
⑤	調和	左の空間を埋めて①～④全体のバランスをとる
⑥	調和	⑤の右横（ポーズ同じ）
⑦	くずし	⑤の左横（ポーズ異なる）
⑧	調和	②と④をつないで全体を円形にイメージして囲む
⑨	調和	センターライン上

Bグループの「生け花3」では、図6、表6の通り、「調和」が計5回、「くずし」が計3回見られた。順番としては、「調和」2回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回となった。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。⑦が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から⑥まで全体的な群のまとまりが見られ、④と⑥の「くずし」が「調和」に転じた。また、⑨が「横に位置取る」ことによって⑧の「くずし」が「調和」に転じた。

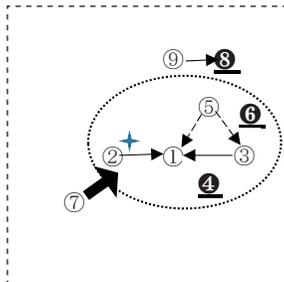


図6. Bグループ「生け花3」位置取り

表6. Bグループ「生け花3」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター右斜め前方
②	調和	①の左横（ポーズ対称）
③	調和	①の右横（ポーズ対称）
④	くずし	①～③の横列の前方（ポーズ異なる）
⑤	調和	①と③の真ん中
⑥	くずし	⑤の右斜め前方（ポーズ異なる）
⑦	調和	左の空間を埋めて①～⑥全体のバランスをとる
⑧	くずし	⑤の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑨	調和	⑧の左横（ポーズ対称）

4-3. Cグループの結果

Cグループの「生け花1」では、図7、表7の通り、「調和」が計2回、「くずし」が計6回見られた。順番としては、「くずし」5回⇒「調和」2回⇒「くずし」1回となった。「調和」は、「横に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。⑦が「横に位置取る」ことによって⑥の「くずし」が「調和」に転じた。また、⑧が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から⑦まで全体的な群のまとまりが見られ、②③④⑤の「くずし」がそれぞれ「調和」に転じた。

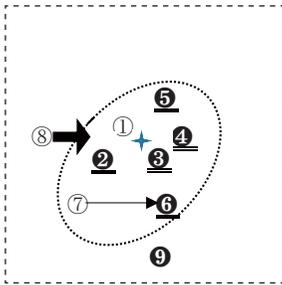


図7. Cグループ「生け花1」位置取り

表7. Cグループ「生け花1」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター左斜め後方
②	くずし	①の左斜め前方（ポーズ異なる）
③	くずし	②の右斜め後方（ポーズ異なる）
④	くずし	③の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑤	くずし	④の左斜め後方（ポーズ異なる）
⑥	くずし	③の右斜め前方（ポーズ異なる）
⑦	調和	⑥の左横（ポーズ対称）
⑧	調和	左の空間を埋めて①～⑦全体のバランスをとる
⑨	くずし	センターラインから右へやや外れた前方（ポーズ異なる）

Cグループの「生け花2」では、図8、表8の通り、「調和」が計6回、「くずし」が計2回見られた。順番としては、「調和」3回⇒「くずし」1回⇒「調和」2回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回となった。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」「全体を円形にイメージして位置取る」が見られた。⑦が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から⑥まで全体的な群のまとまりが見られ、⑤の「くずし」が「調和」に転じた。また、⑨が「円形のイメージをして囲むように位置取る」ことによって、⑦と⑧がつながり、⑧の「くずし」が「調和」に転じた。

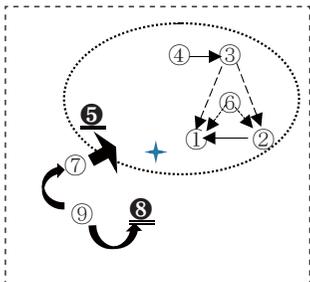


図8. Cグループ「生け花2」位置取り

表8. Cグループ「生け花2」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター右斜め後方
②	調和	①の右横（ポーズ同じ）
③	調和	①と②の真ん中
④	調和	③の左横（ポーズ対称）
⑤	くずし	①から距離をとった左斜め後方（ポーズ異なる）
⑥	調和	①と②の真ん中
⑦	調和	左側の空間を埋めて①～⑥全体のバランスをとる
⑧	くずし	センター左斜め前方（ポーズ異なる）
⑨	調和	⑦と⑧をつないで半円をイメージして囲む

Cグループの「生け花3」では、図9、表9の通り、「調和」が計6回、「くずし」が計2回見られた。順番としては、「調和」2回⇒「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」1回⇒「調和」3回となった。「調和」は、「2者の真ん中に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。なお、②③は「左もしくは右斜め前方」、⑤は「左斜め後方」に位置取っているが、ポーズが①もしくは②と類似していたり同じであったりして、群としてのまとまりが見られるため「調和」とした。⑧が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から⑦まで全体的な群のまとまりが見られ、④と⑥の「くずし」がそれぞれ「調和」に転じた。

表9. Cグループ「生け花3」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター右斜め後方
②	調和	①の左斜め前方（ポーズ類似）
③	調和	①の右斜め前方（ポーズ類似）
④	くずし	③の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑤	調和	②の左斜め後方（ポーズ同じ）
⑥	くずし	⑤の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑦	調和	②と③の真ん中
⑧	調和	左の空間を埋めて①～⑦全体のバランスをとる
⑨	調和	④と⑥の真ん中

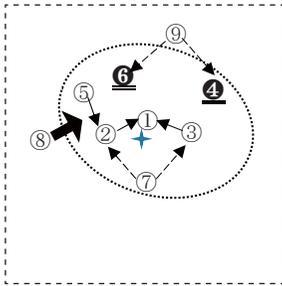


図9. Cグループ「生け花2」位置取り

4-4. Dグループの結果

Dグループの「生け花1」では、図10、表10の通り、「調和」が計5回、「くずし」が計3回見られた。順番としては、「調和」1回⇒「くずし」2回⇒「調和」4回⇒「くずし」1回となった。なお、③は、①と②の右横真ん中に位置取っているが、ポーズが異なっていることにより、「くずし」とした。「調和」は、「横に位置取る」「センターライン上に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。⑥が「横に位置取る」ことによって④の「くずし」が「調和」に転じた。また、⑧が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって、①から⑦まで全体的な群のまとまりが見られ、③の「くずし」が「調和」に転じた。

表 10. Dグループ「生け花1」の位置取りの状態

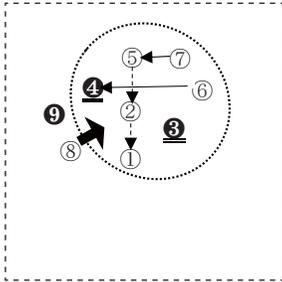


図 10. Dグループ「生け花1」位置取り

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター
②	調和	センターライン上の①の後方
③	くずし	①と②の右横真ん中（ポーズ異なる）
④	くずし	②の左斜め後方（ポーズ異なる）
⑤	調和	センターライン上の②の後方
⑥	調和	④の右横（ポーズ類似）
⑦	調和	⑤の右横（ポーズ対称）
⑧	調和	左の空間を埋めて①～⑦全体のバランスをとる
⑨	くずし	⑧の左斜め後方（ポーズ異なる）

Dグループの「生け花2」では、図11、表11の通り、「調和」が計7回、「くずし」が計1回見られた。順番としては、「調和」3回⇒「くずし」1回⇒「調和」4回となった。「調和」は、「横に位置取る」「2者の真ん中に位置取る」「センターライン上に位置取る」が見られた。⑥が「横に位置取る」ことによって、⑤の「くずし」が「調和」に転じた。

表 11. Dグループ「生け花2」の位置取りの状態

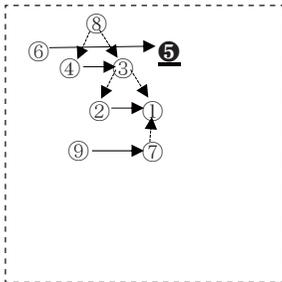


図 11. Dグループ「生け花2」位置取り

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター
②	調和	①の左横（ポーズ対称）
③	調和	①と②の真ん中
④	調和	③の左横（ポーズ対称）
⑤	くずし	③の右斜め後方（ポーズ異なる）
⑥	調和	⑤の左横（ポーズ対称）
⑦	調和	センターライン上の①の前方
⑧	調和	③と④の真ん中
⑨	調和	⑦の左横（ポーズ類似）

Dグループの「生け花3」では、図12、表12の通り、「調和」が計3回、「くずし」が計5回見られた。順番としては、「くずし」1回⇒「調和」1回⇒「くずし」2回⇒「調和」2回⇒「くずし」2回となった。なお、②は①の右横、⑤と⑧はそれぞれ②と④の後方に位置取っているが、ポーズが異なっていることにより「くずし」とした。「調和」は、「横に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」が見られた。③が「横に位置取る」ことによって、②の「くずし」が「調和」に転じ、①を中心とした①～③の群のまとまりが見られた。また、⑥が「全体のバランスをとって左に位置取る」ことによって①から⑤まで全体的な群のまとまりが見られ、④と⑤の「くずし」が「調和」に転じた。

表 12. Dグループ「生け花3」の位置取りの状態

順 番	状 態	位置取りの詳細
①	—	センター
②	くずし	①の右横（ポーズ異なる）
③	調和	①と②の左横（ポーズは②と同じ）
④	くずし	③の左斜め前方（ポーズ異なる）
⑤	くずし	②の後方（ポーズ異なる）
⑥	調和	左の空間を埋めて①～⑤全体のバランスをとる
⑦	調和	④の右横（ポーズ対称）
⑧	くずし	④の後方（ポーズ異なる）
⑨	くずし	全体から距離をとった真ん中（ポーズは異なる）

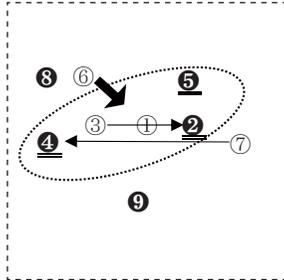


図 12. Dグループ「生け花3」位置取り

5. 考察

4グループ計12パターンの「生け花」の位置取り結果から、以下のことが考察された。

5-1. 「調和」とは「2者間の対話」「3者間の対話」「全体との対話」「場との対話」である

位置取りの状態を示す「調和」を種類別に見ると、一番多かった種類は「前後左右（斜めも含む）」の位置取りで31場面あった。次いで多い種類は、「2者の真ん中」の位置取りで16場面であった。第3番目は、「全体のバランスをとる」位置取りで9場面であった。第4番目は、「センターライン上」の位置取りで4場面であった。最後は、「全体の隊形をイメージする」位置取りで2場面であった。

この結果から、運動者は創作ダンスの過程において、ある特定の他者と「前後左右（斜めも含む）」に位置取るという、自己と他者の「2者間の対話」を行っていたことが分かる。また、「2者の真ん中」に位置取るという、自己と2人の他者との「3者間の対話」も行っていた。さらに、「全体のバランスをとる」や「全体の隊形をイメージする」位置を取るという自己と「全体との対話」や、「センターライン上」に位置取るという自己と「場との対話」も行っていた。つまり、創作ダンスの即興表現における「調和」という状態は、「2者間の対話」「3者間の対話」「全体との対話」「場との対話」であると考えられる。

5-2. 「くずし」（変化）は「調和」が飽和状態に達した時に起こりやすい

創作ダンスの過程に見られる「くずし」（変化）が起こる時のグループの位置取りに着目すると、Cグループ「生け花2」の⑧を除いて、全ての「くずし」（変化）が見られる場面の直前は、完全な対称形もしくはほぼ対称形の「調和」状態であることがわかる（ただし、「くずし」から始まっているパターンの最初の「くずし」は除く）。完全対称形で起きた「くずし」（変化）としては、Aグループ「生け花2」の④と⑥、

Aグループ「生け花3」の⑥, Cグループ「生け花3」の④, Dグループ「生け花3」の④が挙げられる。ここから、「くずし」(変化)は、もうこれ以上「調和」した位置取りが難しいと思われるタイミングで起こっており、「調和」の飽和状態で起きやすいということ考えられる。

また、「くずし」(変化)が連続で続いている位置取りに着目すると、Dグループ「生け花1」の③④, 同じくDグループ「生け花3」の④⑤と⑧⑨の計3回があった。なぜ「くずし」(変化)が連続して起きるのかを見ると、1回の「くずし」(変化)ではくずし切れずに、ほぼ対称形の「調和」状態が続いて解消できていない状態であることがわかる。Dグループ「生け花1」の③④の場合は、③の「くずし」(変化)の後、①～③が三角形にも捉えられることから、さらに④の「くずし」(変化)が起きたと思われる。Dグループ「生け花3」の④⑤の場合は、④の「くずし」(変化)の後、①～④がほぼ1列に捉えられることから、さらに⑤の「くずし」(変化)が起きたと思われる。Dグループ「生け花3」の⑧⑨の場合は、⑧の「くずし」(変化)の後、①～⑧がほぼ2列に捉えられることから、さらに⑨の「くずし」(変化)が起きたと思われる。ここから、「調和」がくずし切れない場合に「くずし」(変化)が連続して見られやすいと考えられる。

5-3. 創作ダンスの即興的表現は「くずし」(変化)が「調和」に変換されて「調和」と「くずし」(変化)の往還で成り立つ

12パターンの「生け花」は、どれも「調和」と「くずし」(変化)が入れ替わり立ち現われた。5-2で述べたように、「調和」が飽和状態になってくると「くずし」(変化)が起こりやすくなり、起こった「くずし」(変化)は、後に移動する運動者の位置取りによって、「調和」へと変換された。こうした現象は、後に移動する運動者が「横に位置取る」「全体のバランスをとって位置取る」「全体の隊形(円)をイメージして位置取る」ことによって、どのグループにも起こっていた。Aグループは「生け花1」で2回、「生け花2」で2回、「生け花3」で1回見られた。Bグループは「生け花1」で2回、「生け花2」で1回、「生け花3」で2回見られた。Cグループは「生け花1」で2回、「生け花2」で2回、「生け花3」で1回見られた。Dグループは「生け花1」で2回、「生け花2」で1回、「生け花3」で2回見られた。ここから、創作ダンスにおける即興表現は、「調和」と「くずし」(変化)の往還で成り立っていると考えられる。

6. おわりに

本研究は、創作ダンスの即興表現における学びの様態について、グループ内での運動者の位置取りに着目して明らかにすることを目的としてきた。

その結果、運動者は他者や場との関係を見極めつつ位置取り、全体的にまとまりのある表現が見られると(調和)、自分なりの表現を行い(くずし)、その個々の表現はまた他者との関係を見極めた位置取りにより新たなまとまりのある表現(調和)へと

移り変わっていく様が見られた。つまり、他者の表現により、自己の思いがけない新しい表現が生じし、さらにそれが他者の新たな表現を生むという学びの様態が見出された。

本研究では運動者の位置取りに着目してきたが、創作ダンスでは、「なりきる」という運動の文化的な価値に運動者が深く触れることができる授業実践が望まれる。そのため、運動者がなりきる対象に抱くイメージをどのように深めていくのかについて、位置取りやポーズなどの動きに加え、運動者が位置取る前後の状況（移動の動きやスピード）や表情なども含めて、今後考察していく必要があると考える。

【引用・参考文献】

- 麻生和江（1988）「表現運動・創作ダンスの学習における『恥ずかしさ』について」『大分大学教育学部研究紀要』大分大学教育学部 第10巻第2号 pp.331-339
- 古木竜太（2010）「『恥ずかしさ』を払拭する身体表現授業とは～保育者養成課程における3年間の実践より～」『女子体育』日本女子体育連盟 第52巻第5号 pp.36-41
- 原田純子（2006）「外に向けて拓かれていく身体と心－創造的身体表現活動の価値を考える－」『人体科学』人体科学会 第15巻第2号 pp.25-36
- 伊藤菜野（2013）「『他者との関わり』を創出するダンス授業に関する研究－2つの授業を事例に－」『日本女子体育連盟学術研究』日本女子体育連盟 第29巻 pp.17-35
- 北島見江（1982）「姫路市小学校教員におけるダンス教育の現状とその意識」『武庫川女子大学紀要, 人文・社会科学編』武庫川女子大学 第42号 pp.97-102
- 国立教育政策研究所（2004）「小学校体育各内容に対する意識等」『平成16年度音楽等質問紙調査』国立教育政策研究所 pp.5-7
- 松田恵示（2011）「小学校女性教師にとっての『体育』の学習指導」『体育科教育』大修館書店 第59巻第12号 pp.26-29
- 村田芳子（2002）「『4つのくずし』に挑戦」『最新楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス』小学館 p.13
- 村田芳子（2009）「リズムから表現へ－2つの入り方・4つのくずし－」『女子体育』日本女子体育連盟 第51巻第7・8号 pp.24-25
- 村田芳子（2012）「必修化をチャンスに、今こそ面白いダンスの授業を！」『体育科教育』大修館書店 第60巻第2号 p.9
- 新山順子・西山修（2014）「保育者養成における即興表現の授業実践と学びの特性」『保育学研究』日本保育学会 第52巻第2号 pp.255-267
- 岡野昇（2015）「体育における対話的学びをデザインする」岡野昇・佐藤学編『体育における「学びの共同体」の実践と探究』大修館書店 pp.3-54
- 佐伯胖（1995）「文化的実践への参加としての学習」佐伯胖ほか編『学びへの誘い』東京大学出版会 pp.1-48

- 佐藤学（1995）「学びの対話的実践」佐伯胖ほか編『学びへの誘い』東京大学出版会 pp.49-91
- 玉城昭子（1986）「ダンス指導をめぐる小学校教師の意識」『琉球大学教育学部紀要第二部』琉球大学教育学部 第 29 号 pp.191-207
- 寺山由美（2005）「舞踊教育における学習内容の検討－特に小学校における『表現』に着目して－」『日本女子体育連盟学術研究』日本女子体育連盟 第 22 卷 pp.29-38
- 宇土正彦（1983）『体育科教育法入門』大修館書店 pp.5-8
- 上野直樹（1996）「協同的な活動を組織化するリソース」『認知科学』日本認知科学学会 第 3 卷第 2 号 pp.5-24
- 柳瀬慶子（2009）「表現運動の授業における『他者関係』に関する研究」『日本女子体育連盟学術研究』日本女子体育連盟 第 25 卷 pp.25-37
- 柳瀬慶子（2014）「表現運動における『文化的な価値』に関する研究－『リズムにのるといふこと』に着目して－」『高田短期大学紀要』高田短期大学 第 32 号 pp.77-86

